Historical Studies of Socialist System

ISSN 2432-8774

社会主義体制史研究

No.8（June 2019）

東独通貨マルクのヤミレートの暴落（1987 年 1 月）

青木　國彦（東北大学名誉教授）

Der inoffizielle Kurs der DDR-Mark purzelte dramatisch (Jan. 1987)

Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)

社会主義体制史研究会
The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

『社会主義体制史研究』(Historical Studies of Socialist System)

ISSN 2432-8774

Website: http://www.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm

publisher: 社会主義体制史研究会

(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)

size: A4

mail to: aoki_econ@tohoku.ac.jp

不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。

旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

表紙の写真 1981 年 11 月 15 日撮影(© Kunihiko AOKI)

哲学者ヘーゲル 150 年忌

撮影前日に哲学者ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel)の 150 年忌が東ベルリン中央区のドロテーン墓地(Friedhof der Dorotheenstädtischen und Friedrichswerderschen Gemeinden)で催されたと知り、同墓地へ出かけて撮影した。

花輪を供えたのは東独支配党 SED の中央委員会と国家評議会 、内閣 、東ベルリン市、科学アカデミー、マルクス・レーニン主義研究所、ベルリン・フンボルト大学であり、党の花輪には「ドイツの偉大な哲学者・人文主義者に」とあった(Neues Deutschland, 1981.11.16)。

墓地の隣に劇作家・演出家ブレヒト(Bertolt Brecht)夫妻の家(Brecht Haus)があり、その墓もヘーゲルの墓の近くにある。

【紹介】

東独通貨マルクのヤミレートの暴落(1987 年 1 月)

青木 國彦(東北大学名誉教授)

Der inoffizielle Kurs der DDR-Mark purzelte dramatisch (Jan. 1987)

Kunihiko AOKI
(Professor emer., Dr., Tohoku University)

東独の通貨にはツーリスト向け公式レート(1 東独マルク=1 西独マルク)とブラックマーケットで成立するヤミレート(1980 年代前半はおおよそ 5 東独マルク=1 西独マルク)、それにコメコンで協定される貿易レートがあった(同じくおおよそ 3 東独マルク=1 西独マルク)。

東独マルクは国外との間の持ち出し・持ち込みが禁止であったので、ヤミレートで入手した東独マルクの東独持ち込み・使用は違法であったが、西独での東独マルクの取引は違法ではなかった。以下の記事にあるように、東独が運営する西ベルリンの都市内鉄道 S バーンの駅構内でも西独の銀行がこのレートに基づく両替店を開いていた。

マーケットで成立するレートは通貨の国内での表面的な購買力(物価)以外の色々な要素も反映する。シュピーゲル誌がかつて、東独マルクの場合にどのような要素が絡んでいるかの一端を詳しく報じたことがあった(DDR: Heimlicher Handel, in: Der Spiegel 6/1987: S.90-92)。それを東北大学経済体制研究会研究資料『経済体制研究』第 6 号(1988 年 3 月)に紹介した。

以下にはその紹介を再録する。前書きは青木によるもので、記事は 2 段組み部分である。再録に当たり、一部の時称の変更や分かりにくかった表現の是正、簡略化などを加え、注記(脚注と本文〔〕内)を追加した。また図 2(原図と同じ内容)と図 2a を加えた。

訂正:上記紹介の際に出所を「1987 年第 7 号(2 月 2 日付発行)」としたのは誤記で、正しくは「1987 年第 6 号(2 月 2 日付発行)」であったので、お詫びして訂正します。

前書き

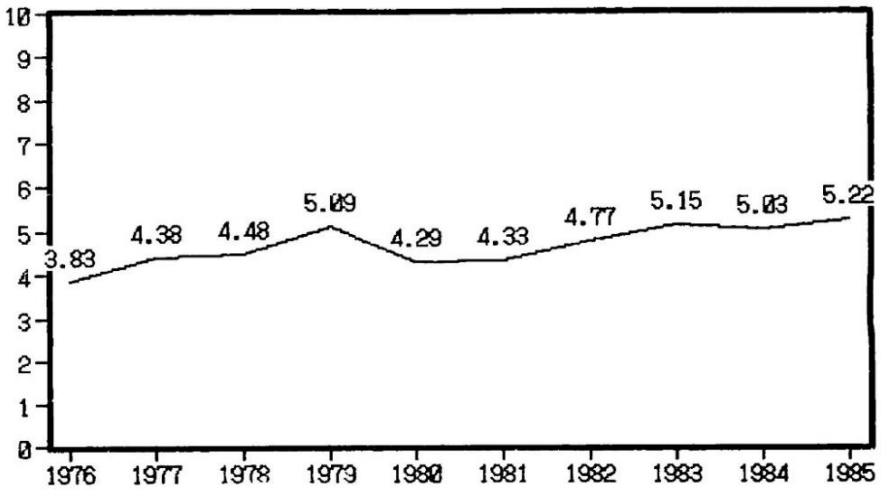
1987 年初めの西独の知人からの手紙で、東独マルク(Mark der DDR)のヤミレートが年初に暴落したことを知った。そこで当時西独週刊誌シュピーゲル(Der Spiegel)その他の、こういう問題をすばやく扱うであろう紙誌に注目していた。

するとシュピーゲルの 1987 年第 6 号(2 月 2 日付発行)にそれについてのレポートが載った。同誌はもともとこの種の問題に強い。その大筋を紹介する(但し全体の翻訳ではない)。

ここで扱われるヤミレートは、直接には国外でしかも相当に大きい規模で成立した。ソ連東欧諸国に比べた特殊性もあるが、これによって社会主義諸国の自国通貨とハードカレンシーとの間のヤミ交換レートの実相の一端をよく知ることができる。また文中にに出てくる両替所では他の東欧通貨も扱われている。

比較的最近でもわが国の「革新」派の人々の中にはこうしたヤミレートを西独の帝国主義的謀略によると信じている人がいて、私はびっくりしたことがある。今もってそう考える人はいないとは思うが、しかし他方その実態を表象できる人もあまりいないだろう。この紹介が参考になればと思う。

図 1 東独マルクのヤミレート:各年末の 1 西独マルク(DM)当たり東独マルク(M)



東独マルクの公式ツーリスト・レートは、両独の各マルクを 1:1 とするものであり、東独内部でのヤミレートはここに紹介するヤミレートをおおむね反映した。

暴落以前の最近のヤミレートがどうであったかを知るために、 World Currency Yearbook の 1985 年版から算出・作成した東独マルクのヤミレートを図示すると、**図 1** のごとくであり、比較的安定的に推移してきたことが分かる。そして 1986 年のレートは、このシュピーゲルが用いた DIW 資料によると、年間平均で 1 西独マルク＝5.72 東独マルクであった。

なお、当時ハンガリーの銀行は、東独・西独マルク両替について上記の公式レートとヤミレートの中間のレートを店頭に掲げていたが、それはコメコン貿易レートによるものであった。　（1988 年青木、一部修正）

西ベルリンの両替店[1]は最近何週間以来〔つまり 1987 年初めから〕上品そうな東の顧客でこみあっている。これらのうちの多くは、東ベルリン駐在の外交団に属する連中である。彼らは山のような東独マルクを売る。しばしば印刷されたばかりのものであり、東独国立銀行の帯封をつけたままのこともある。その額が何百万マルクに達することもある。

西ベルリンの通貨専門家は先月〔1987 年 1 月〕に、1 億マルクの東独マルクが流入し、市場が消化できる額を少なくとも 1000 万マルクは上回った、と推測している。その結果、一時的には、1 西独マルクにたいする東独マルクのレートが 1:6 から劇的にも 1:10 近くにまで暴落した。先週には〔1 月末〕再び落ち着きを取り戻した（**図 2・図 2a**）。

西ベルリンの銀行筋の分析では、東独マルクの突然の暴落を引き起こしたのは、東独のマイクロエレクトロニクス産業における銀不足の切迫化であった。すなわち、不足している外貨を使うことなく銀不足というのボトルネックを解消するために、東独の国営造幣工場（VEB Münze）は突然地金 1 kgあたりの銀の買入れ価格を 6200 東独マルクに引き上げた。西側での最近の価格は 450 西独マルク以下にすぎない。

〔従って銀商品購買力による平価はおおよそ 1:14 ということになる。〕

東独で銀を売り、それによって得た東独マルクを西ベルリンで西独マルクに替える者は、100 東独マルクが 12 西独マルクというレートでさえひともうけできる。彼は 6200 東独マルクで 744 西独マルクを手に入れることができる。

〔図 2 のように 1987 年 1 月 19 日のヤミレートは売りと買いの中央値が 100 東独マルク=12.25 西独マルクであった。その際の店側買い取り値による計算が 744 西独マルクだとすれば、100 東独マルク=8.33 西独マルクでの買い取りになる。それでも西独で銀 1kg を売る場合よりも 1.65 倍以上の売上げに相当する。〕

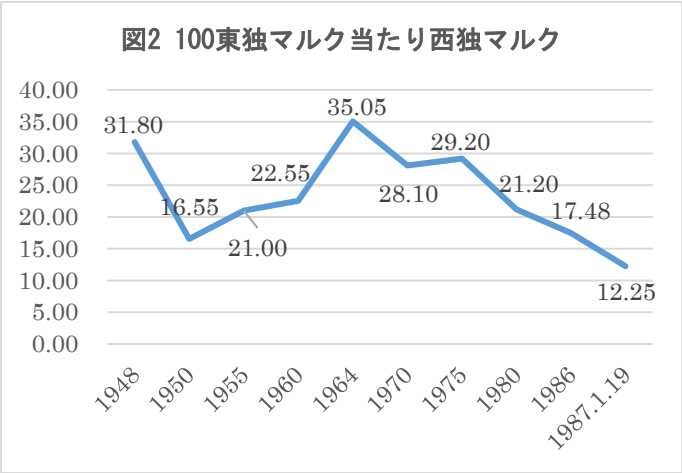
これを利用したのは、銀食器を売った東独市民だけではなかった。東ベルリン駐在の多くの外交官たちも相当の投機収益を挙げたのである。彼らは、外交官特権を利用して大量の銀を西ベルリンから東ベルリンに持込み、それを東独国営造幣工場に売り、得た東独マルクを西ベルリンの両替店でハードカレンシーに替えた[2]。

こうした銀取引は、東と西の間の通貨両替の一部にすぎない。西側の業者の推計では、1 年間に 2.5 億東独マルクが国際市場に流入している。これは東独にとりプレステージでもあるが、為替管理が穴だらけだということでもある。

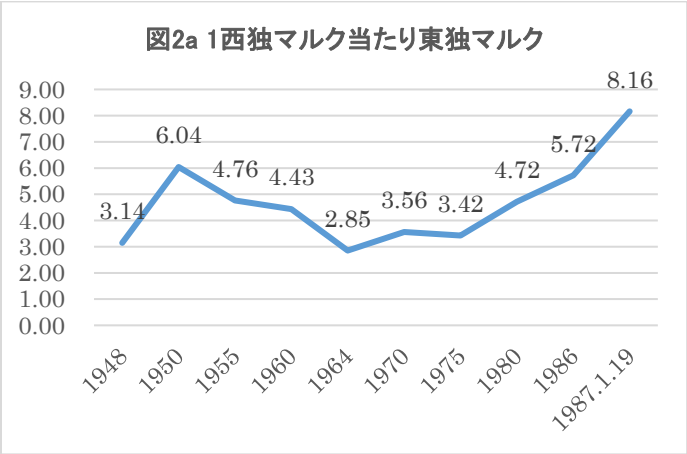
東独は、元来は純粋に国内通貨であって外国では使用されえない東独マルクが、西側との国境を超えて流出・流入するのを傍観せざるをえないできた。

東独マルクが外交官の荷物の中や東独の年金生活者[3]の包帯の下に隠されたり、外国人の運び屋や教会関係者も運び出した。

主なターンテーブルは西ベルリンであり、そこの銀行や私営両替店が東独マルク取引の大半をこなした。



（注）売りと買いの中央値。（出所）DIW データによるシュピーゲル誌の図



（注）図 2 データから派生（青木作成）。

西の人間が 1:1 という公定レートではなく、ヤミレ

[1] ツォー駅（Zoo）構内とその周辺に多い。

[2] 言うまでもないが、彼らはノーチェックの車で往来するので大量の運搬が可能である。

[3] 東独は、西独の特殊な国籍政策もあって、国民の西側への旅行を強く制限したが、年金生活者については年間合計 30 日以内は何回でも西へ行くことができた。

ートで安く東独マルクを買って東に持ち込むと、まずまずのレストランでの 10.40 東独マルクの豪勢なステーキがチップ程度の出費で済む。

〔このステーキは公定レートでは 10.40 西独マルク、当時約 800 円であるが、ヤミ購入レートを 1:5 とすると、約 2 西独マルク、約 160 円になった。〕

西から東への旅行者は、東独マルクのヤミ持込みのリスクをおかす気さえあれば、いくらでもヤミレートを利用できる。例えば東の親戚や愛人へのプレゼントにできる。特権を持つ者、例えば西側連合軍の軍人は国境でのチェックをうけないので、リスクなしに買い出し旅行ができる。目当てはなんといっても光学製品、とくにツァイスの双眼鏡である。

東独には重大な為替犯罪には 10 年以下の懲役という刑罰があるが、それによって東独マルクのヤミ流出入を阻止することはできていない。東独当局にとっては旅行および国境検査の簡単化という現在の流れがチェックを一層困難にしている。

最大の運び屋は東ベルリン在住の外交官である。彼らの多くは給与の大部分を東独マルクではなくハードカレンシーで得ている。彼らは、それを西ベルリンで東独マルクにかえ、国境検査を受けることなく東へ持込むことによって、自分の給与の購買力を引き上げている。

こうしたことをするのは、東側の外交関係者だけではない。西独の東ベルリン常駐代表部は 1982 年にある男を退去させた。彼は少なくとも 50 万東独マルクの持込みをはかった。

東独は通貨のヤミ移動によって何千万マルクもの外貨収入を失っている。加えて、ヤミレートのために西側旅行者にとっては東での買い物が有利となるが、彼らが買おうとする多くは東独での不足商品であるため、東独国民にとって不足の増幅になる。

だから、東独が 1980 年にヤミ両替によってこうむっている「国民経済的損害」にクレームをつけ、それを西側からの旅行者 1 人 1 日あたりの義務交換額の 25 西独マルクへの引き上げの理由としたのは、当然である[4]。

だが、実は東独自身もこうした「損害」に関与している。すでに 1970 年代に、印刷されたばかりの東独マルクがトランクでチューリッヒやフランクフルト、ウィーンの両替所に持ち込まれるようになった。

そこでの両替によって得た西側通貨が東独国営企業(VEB)を苦境から救うのである。その西側通貨で東独企業は、そうでもしなければ至急には入手できない機械部品や工業用ダイヤ、ファスナーなどを、買付けた。

西ベルリン最大の東独マルク流出入口には、東独がテナントの権利を与えている。ドイツ交通クレジット銀行(DVKB、西独)が、東独鉄道会社ライヒスバーンのツォー(Zoo)駅〔西ベルリン〕に両替窓口を維持している。

「駅に来るどの人も、あたかも西ベルリンで東独自身が、東独マルクの買入れを西ベルリンで成立しているレートにまで安くしているかのような印象を得てしまう」とある同業者は東ベルリンに苦情を申し立てた。

東独国内でも社会主義統一党(SED)は、ヤミレートに対して念仏のように繰り返す非難にもかかわらず、1986 年半ばまであてはまっていた 1:5 というレートを使用している。すなわち、東独内の食品や衣料、靴などの高級店(Delikat や Exquisit ショップ)では国営商店が東独マルクで支払う客に対しては西側製の高品質品に 3〜7 倍の高値をつけて販売している。

インターショップ[5]での買い物のために、かしこい東独市民は西独マルクを各地域の中心都市でヤミ両替で入手する。その際のレートは市場の法則による。

南部の都市ゲラに近いヘルムスドルフのジャンクション[6]ではすでに 1 年前から、東独市民はトランジット客と文句も言わずに 1 西独マルク=7 東独マルクというレートで交換している。東独南部の人々にとって中心的な両替場所はここのドライブインである。

それ以外のことは注意深く見張っているシュタジ(東独国家保安省またはその職員)もこのことには両目を閉じている。というのは、西側の通貨を手に入れるには、SED の上部の者にとってどんな手段も正当なのである。首都での組織されたヤミ市場でさえ。

東ベルリンの目抜き通りウンテア・デン・リンデンからほんの数メートルしか離れていない所に毎朝、経験のない西側旅行者から西独マルクやドルを引き出すために数人のプロが立っている。カモを見つけると、口実をもうけて話しかけ、両替を頼みこむ。

そういう場合のレートは西ベルリンほどに有利ではないが、1:4 にはなり、しかも国境検査のリスクがない。但しプロはカモに、「東独マルクを使い残しても国境を出るときに 1:1 で西独マルクに交換できます」などと騙すが、旅行者が騙されると、国境で少なくとも数時間の尋問という目にあう[7]。

東ベルリンのある金融専門家は率直に、たしかに

---

[4] 東独当局はその後も非難を続けた。例えば 1989 年 1 月 19 日の東独トーマス・ミュンツァー委員会会議における結語の中でホーネッカーが、7 東独マルクが 1 西独マルクという〔西独の〕「商業レート」で交換されているという「略奪」を壁存続の必要理由の 1 つとした。彼は続けて、非常に有名になった言葉、「壁は 50 年、いや 100 年でも存在し続けるだろう」を発した(青木國彦「CSCE(全欧安保協力会議)ウィーン会議へのホーネッカーとシュタジの対応」(『社会主義体制史研究』2、2018:4)。この言葉に付された「その存在理由が除去されないなら」という条件文は、殆ど無意味と見なされた。

[5] 東独内の一般的外貨ショップ。他の共産圏ではドルショップとも言うが、ここでの主通貨は、値札にあるように、西独マルクであった。外貨ショップとしてはほかに外国人観光客向けのスーベニアショップなどもあった。

[6] ヘルムスドルフはドレスデンからアイゼナッハを経てフランクフルトに続くアウトバーンとベルリンからミュンヘンに至るアウトバーンが交差する交通の要衝で、この交差点をヘルムスドルファークロイツ(Hermsdorfer Kreuz)と言う。東独の国内交通のみではなく西独人などのトランジット交通(西ベルリンと西独各地や西欧と東欧の間)も多い。

[7] 旅行者が東独マルクを西独マルクに再交換するには、

非合法取引は不正ではあるが、東独は入手できるどんな西独マルクも必要なのであり、だから党も悪事を我慢している、と認めている。

昨年〔1986 年〕5 月に西独にくらがえした元 SED 幹部ベルク（Hermann von Berg）[8]は、こうしたぐらついた通貨政策は SED にとって引き合わないものだと考えている。彼は、西側での東独マルクのヤミレートが、長年続いてきた 1:5 という標準レートに再び落ちつくとは思っていない。東独マルクの下落はまずなによりも東独経済の絶えざるネガティブな趨勢によるというのが彼の考えである。

東独経済のもっとも重要な問題点は、エネルギー事情の悪さとドイツ内取引〔両独間貿易〕を含む対西側貿易の下降、投資率の後退、対西側債務の再膨張（現在約 80 億ドル）である。

西ベルリンの東独専門家は、SED 指導部がどのようにして西側での東独マルクの下落を阻止するつもりなのか、紙幣のデザインを替えて短い新旧交換期間にするという方法をとられるかどうかを知りたがっている。そうすれば 1964 年のように西に流出している東独マルクは紙くずになってしまう。

但しこの方策を取ると、東独は西におけるそのもっとも重要なパートナーたる諸銀行を怒らせることになる。

東独はそれら銀行のクレジットに頼り続けているのである。

西独マルクを東独マルクに交換した旨の国立銀行の交換証明書が必要であった。また最低交換義務分の再交換には応じなかった。

[8] かつて東独秘密外交官と言われたベルクについては、拙稿「ケネディのベルリン演説（1963 年 6 月）再考：ブラント東方政策との比較」（『社会主義体制史研究』6、2019 年 1 月、52-55 頁）参照。彼は、ソ連を「領土強盗」「狂信的大国国粋主義」と非難し，千島列島を返せという「日本の同志たち〔日本共産党〕の立場を歓迎」しつつ，ドイツにも「併合なき」平和条約を求めた。